

## 図書紹介

◎破壊から再生へ アジアの森から 依光良三編著 日本経済評論社 287頁  
2003年 2,400円+税

本書は、端的に言えば、東南アジア（インドネシア、フィリピン）と東アジア（中国、日本）における地域住民の参加による植林・森林管理の取り組みについての報告である。本書の構成は、まず序章で、森林破壊の社会的弱者への被害のしわ寄せの歴史と、森林再生、特に住民参加による植林への取り組みの概略を述べる。第1章ではインドネシアにおける森林開発の弊害と地域住民を中心とする望ましい森林管理のあり方について分析され、第2章と第3章ではフィリピンのCBFMによる住民の組織的な植林活動の現状が詳細に報告される。第4章では巨大植林プロジェクトである中国の「退耕還林」政策に対して住民の視点から痛烈な分析が行われる。第5章では徳島県吉野川流域における「緑のダム」を目指した森林管理を、第6章では高知県梶原町における「緑のダム」整備やFSC認証所得などの環境保全型の森作りを「地域の力」の切り口で報告し、今後の課題を提起する。

本書の事例国や執筆陣の切り口は様々ではあるが、「住民の視点」に立つ点では共通している。本書が住民参加型の植林・森林管理に注目する理由として、編者は、まず、特に国外においては、森林を生活の場とする人が多く、「住民が納得し組織的かつ主体的に」森林管理に取り組みないことには森の再生が困難なことを挙げる。更に、これまで森の破壊を促進してきた経済至上主義や国家による搾取・統制など「巨大な力」に対抗するために、内発的運動論として地域の力に期待するからだという。こうした「巨大な力」をそのまま放置すれば森は再生せず、極端な場合、第1章のインドネシアの産業植林の例が示すように、植林活動がかえって森林を破壊するというパラドックスさえ生む。しかし本書は、「住民主体の森林管理」の実践は必ずしも容易ではないことも真摯に述べる。本書は、言葉が先行することが多い「住民参加型森林管理」について、様々な事例を詳細に紹介することで住民参加型森林管理のイメージを膨らませることを可能とすると同時に、現場で考えることや生身の地域の人々と一緒に考えていくことの重要性を訴える。住民参加型森林管理を考える上で貴重な一冊といえよう。 (横田康裕)